

# 幼児の一日の活動について (一)

神 沢 良 輔



## 一、はじめに

### ——一日の活動の教育的意義——

#### (1) 一日の活動の意味

幼児の一日の活動ということは、幼児の一日の指導とか、一日の保育の過程ということばにおきかえて考えてみるてもよいであろう。

幼稚園や保育所において幼児が活動するということは、そこで保育者との間に、なんらかの関係があるわけであるし、また保育者の配慮があるわけである。だから、それを保育者の側からみれば、指導ということになる。また、両者の関係を端的にしかも一

般的にいえば、幼児に望ましい活動をもたらせることが指導だということになる。さらにそれらの活動は、時間的経過にしたがって変化していくし、幼児はその中で発達していくわけであるから、それを、幼稚園、保育所という中での問題としてみると、保育の過程ということにもなる。

そして、これらの活動、指導、過程というものの、もっとも基本的な時間的単位として、一日というものが考えられる。それは朝起きて夜寝るといふ、生理的な単位でもあるし、また、朝起きて、顔を洗って、朝食をとって、着替えをして登園してというような活動の基本的単位であり、生活の基本単位でもある。このような単位は、ある程度くり返しのできる単位でもあり、このようなくり返しであるから、安定して一日の活動ができるのである。

日々の生活においても全く同じで、やはり幼児の一日の生活はくり返しの生活である。昨日もしたから今日もするのであり、今日もしたから明日もするだろうと予測できるのである。毎日の生活がくり返しであるから、園へ安心して登園できるし、その中で十分に活動でき、成長し、発達していくことが可能になってくるわけである。

そして、そのくり返しの中で、園におけるひとりひとりの幼児の、また園全体の活動のリズムができるとともに、園における生活のリズムができるのである。そこに、指導の基本的な問題がある。

## (2) くり返しと発達

そこで、このようなくり返しを指導という面からみると、もっとも重要なことは、リズムはくり返されるが、その中で幼児は発達するということである。つまり、生活リズムのくり返しの中で、外見上は同じような活動をしているようにみえても、ひとりひとりの幼児にとっては、それが単なる同じ活動のくり返しではない。その活動は、ひとりひとりの幼児の内面においては、昨日と今日では変化し、発達しているということである。つまり、ひとつひとつの活動自体には、あまり変化がみられなくても、いろ

いろな活動が互いに影響しあって、幼児の心身の全体が発達していくということにもなるのである。もちろん、これらの活動の中には、あるひとつの活動においては発達していくことが、保育者にもよくみてとれるものもある。だがいずれにしても、もう少し長い期間を単位にしてみようと、幼児は、一般的には、同じようなことをくり返しながら、しぜんに、らせん状に発達しているといえるであろう。そのような発達をくり返しのリズムの中で、むりのないように、しぜんにながすがすがし指導である。

しかし、そのような発達の方向の中で、ひとりひとりの幼児の発達の様相は、いろいろである。あるときは急激に、あるときは停滞ぎみに、あるときは量的に、あるときは質的に飛躍をあげたりさまぎまである。だが、その中で常に発達してやまないのだから。そして、このような発達の様相は、ひとりひとりの幼児にとっては、ひじょうに意味のあることである。

活動のくり返しと、変化、発達、これは、一日を単位としたとき、もっとも典型的な、ひとつのまとまりがみられよう。それは、検討したい問題によっては、一日のまとまりの中だけで十分である場合もあろうし、また、場合によっては、そのまとまりの、過去、現在、未来という過程の中でされることもあろう。しかし、いずれにしても、一日が幼児にとって十分に意味のあるも

のでなければいけないし、その中で幼児はほんとうに発達していくのである。そこに、一日の活動の重要な教育的意義がある。

それでは、つぎに、幼児の一日の活動の流れについて、それを支えているリズムや条件、その基本にある幼児の要求という面について、もう少し具体化してみていくことにする。

## 二、幼児の一日の活動の流れ

### (1) 幼児の生活リズム

幼児の園における一日の活動は、幼児の園における生活リズムによってきめられる面がひじょうに多い。

つまり、登園し、保育者にあいさつをかわし、着替えをしたり出席印を押したり、友だちと話し合ったりして、自分のしたい活動へ入っていくだろう。幼稚園教育要領のことを使えば、自ら選んで行なう経験や活動、グループで行なう経験や活動、学級全体で行なう経験や活動を、いろいろな組み合わせにおいてすることになる。そして、さらにそれらは、動的と静的活動と休息、緊張と解放、という、幼児の生活リズムによって支えられているだろう。

いずれにしても、おそらくこのような一日の幼児の活動の流れ

は、それぞれの園において、ほぼ定型化しているのでないかと思われる。だからこそ、このようなくり返しの中で、幼児は安定した活動できるわけであるが、しかし、くり返しの中で、いろいろな活動の順序や、それぞれの活動の時間について、くり返されているということは、いい面も多いのだが、逆に問題になることも多いのである。

### (2) 幼児の要求と一日の活動の流れ

幼児の生活リズムはくり返されるが、そのくり返しは、幼児の生活リズムを基本にしたくり返してなければいけない。そのリズムを保育者の側からみてくみ立てていけば、指導の計画ということになるだろう。しかし、その場合、当然なことではあるが、保育者が一方的に、保育者のもっている生活リズムを押しつけるのではなく、幼児のもっている生活リズムを支えている重要な条件としての、幼児の要求をたいせつにする必要がある。

そこで、幼児の生活のリズムの中での、このような問題について、幼児の要求を中心に以下みていくことにする。

#### (i) 登園すれば、まず先生とふれあいたい

ひとりひとりの幼児には、朝起きてから登園するまでも、いろ

いろいろできごとにてあうであらうし、それが、一日の幼児の活動に影響を与えているであらうが、ここではそれについてはふれないことにする。

なにはともあれ、幼児は登園すれば、まず先生に接したいという要求をもっている。ある幼児は、先生と顔を見合わせ、あいさつするだけで満足できるだらうし、ある幼児は、さらに先生に、自分の要求や気持ちをことばで伝えたり、先生との身体的なふれあいを望むであらう。もちろん、このような先生とふれあいたいという要求の強弱は、ひとりひとりの幼児においても、その日によっていろいろあるだらう。

いずれにしても、保育者としては、このような幼児の要求をじゅうぶん受けとめてやる必要がある。いうなれば、園の一日の保育は、先生と幼児とのふれあいから始まる。

これは、幼児の活動からいえば、「おはよう」「おはよう」「ごいませ」という、先生と朝のあいさつをかわすということになるかもしれない。しかし、たいせつなことは、ただじょうずに、ことばで朝のあいさつができるということではない。そのことばを通して、保育者と幼児がお互いにお互いの感情を受けとめ認めあっていくということである。だから、あいさつのことばは形式的なものではなく、生きた生命力をもったことばの交換でなければなら

ない。また、お互いに通じあっていれば、ことばを発生する以前の、お互いの目と目とあっただけでもじゅうぶんであらう。そこに、保育者と幼児との間の信頼関係が生まれ、幼児の安定感が生まれる。

このように、先生とのふれあいがなくては、園における幼児の活動は始まらないといえる。そしてこれは、園でいかなる行事があらうと、それに関係なく毎日くり返されねばならぬことである。

そのためには、保育者はいかなることがあらうと、ひとりひとりの幼児と、安定した感情でじゅうぶん時間をかけ、落ち着いてふれあいをしてやるがたいせつである。すこし、極端ないい方をすれば、いかなる理由があっても、そこに保育者がいないければ、たとえ幼児が登園して活動していたとしても、その幼児にとってほんとうの意味における園の一日の活動は、まだ始まっているといえないといえる。

だから、保育者が、その時刻に、その場所になかったり、その日の準備のために動きまわって、いいかげんなふれあいをするようでは、その幼児にとっては、保育者と関係なしに活動が始まることになり、そこには指導ということがなくなってしまうことになる。これを幼児の側からみれば、先生にぜひ話を聞いてもらいたいと思って勇んで登園してきた幼児もいるだらうし、昨日い

やなことがあって、先生の顔を見て、その反応によっては帰ろう  
と思つて、いやいや登園してきた幼児もいるのである。

もし、このような幼児たちの要求や感情が、朝の保育者とのふ  
れあいでも満足されなければ、幼児は保育者に対する信頼をなくす  
であろうし、朝の第一歩から不安定なまま活動にはいつていくこ  
とになるのである。

(ii) 自己をじゅうぶんに表現したい。

保育者とのふれあいでも安定感をもった幼児は、自己をじゅうぶ  
んに發揮できる活動に、スムーズにとりくむことができよう。

それは、ある幼児にとっては、積木をより高く積むことであ  
り、ある幼児にとっては、ボールを遠くまでころがすことであ  
り、ある幼児たちにとっては、昨日のままごや、鬼あそびや、  
製作の続きであるかもしれない。

これらの活動は、幼児にとっては、自ら選んで行なう活動、で  
あるから、楽しい興味のある活動であるべきである。だから、し  
んげんにとりくむことが可能であるし、その中で、自己をじゅう  
ぶんに表現（実現）できるのである。

そのためには、自分の活動の目標とその水準を、ひとりひとり  
の幼児が自分で定める必要がある。それは幼児の発達の程度によ

っても異なるが、ことばではっきりいえる場合もあるし、ことばで  
はいえない場合もある。また何らかの活動にしんげんにとりくん  
でいる間に、目標ができてくる場合もある。

しかし、幼児の活動は、本質的にあくまでも流動的である。幼  
児は自分の活動の目標も、その水準もよく変化する。だから、幼  
児に、「いまなにしているの」と聞いても、幼児は答えてくれな  
い場合が多いし、また、答えてくれたとしても、「つくってるの」  
などと、活動の一部分や表面的な面についていつていっていることが多  
い。それは、保育者が幼児の活動のなからみつけたすことであ  
るし、保育者がみつけたせるように平素から努力しなければ、幼  
児の目標は保育者には見えてこないだろう。

なにはともあれ、それぞれの時点において、幼児は、変わるか  
もしれない自分のきめた目標に対して、ほん気になってとりくむ  
のである。そして、その中で自己を表現していくし、そこで発達  
していくのである。

それは、自分の要求に対する満足である場合もあろうし、自分  
を出しきって表現したという満足である場合もあろう。また、苦  
労はしたが目標を達成したという満足である場合もあろう。

いずれにしても、幼児にとって、なにかをしたい、それが実現  
したということは、幼児の発達にとって、もっとも大きな価値の

ある経験であり、このような経験を通してこそ、ほんとうの発達があるのである。そのためにも、このような「自己をじゅうぶん表現したい」という要求をじゅうぶんに満足させてやることは、一日の幼児の活動の中で、その重要な部分を占めることが必要である。

そのために保育者は、幼児と活動をともしたり、それをみつめるなかで、ひとりひとりの幼児のそのときの状態を判断して、幼児の目標をはっきりさせるための援助や、それを達成できるようはげましてやらなくてはならないとともに、ときには直接的な助力も必要であろう。また、幼児が活動にしんげんにとりくめるように、じゅうぶんな配慮をはらう必要もある。

### (iii)

じゅうぶんに活動できる時間がほしい

ひとりひとりの幼児が、自己をじゅうぶん表現できるためには、それに必要なじゅうぶんな時間を与えてやる必要がある。

ここで、四日市市立泊山幼稚園の研究(註)から、その実際例を紹介してみよう。

「運動会もあと一週間、きょうはすこし暑いので、戸外でまわってするリズムや競技をすこし早い目からはじめよう」と計画した。二種目のリズムを交互にし、そのあと、玉入れや大玉ころが

しなど、五学級の幼児たちがかわりあつてすると、相当の時間を要してしまった。

自分たちの学級のやらない間に、手洗いにいったり、お水をのみにいきましよう、などと指示を与えると、幼児たちは、いちどにどつと水道の方へとんでいった。すぐにもどつてくるものと思つて待っていても、大半が部屋へ入つてしまふ。なかなかでてこないで、なにをしているのだろうかとみにいくと、絵画コーナーで、画紙いっぱい絵をかいている。Yはポスターカラーで赤まるや青まるを大きくかき、大玉ころがしの絵である。また、M夫は美しい小鳥を紙いっぱい模様のようになん羽もかき、にわとりがえきをたべているところなど、くちばしが大きく子どもらしくのびのびとかかれ、A子はまっ赤な兎を三匹もかいて足もとがとてもおもしろいかっこうだ。C子は形にならず、ポスターカラーの色をつぎつぎにならべ、美しい色あそびである。つぎつぎに早いタッチで絵がかかれ、絵画コーナーは満員で、すでにかきあげて並べてある幼児もいる。なにがなんでも、いまのうちに思うぞんぶんしようといった表情で、みんな必死になつてとくりくんでいるようである。まだ戸外でやる競技もあったので「またみている席へもどつていらっしやい」といったはずなのに部屋へ入るなんて……と約束を守らないことにすこし腹をたてて、部屋の中にいる幼

児たちを呼びにいったつもりであったのに、幼児たちのようすをみると、呼びもどす元氣もすっかりなくなっていました。

まともに席にかえってきた幼児たちも、そこに坐っているだけで、出番を待とうという氣は全然なく、自分たちのしたいことを遠慮なくやっている。みんなが砂遊びの道具をもちだしてきて、その場で砂遊びである。道路をつくり、立体交差をつくり、のりもの遊びに夢中なのだ。

—このようなことはよくあることだが、保育者の一方的な計画のもとに、幼児たちの要求がいれられなかったためにおこる現象であらう。

幼児たちは、やはり、第一に「自己をじゅうぶん表現するための、じゅうぶんな時間」を要求しているのである。もし、前述のような活動がその後においても相当期間続けば、はじめは、わずかな時間のみつけて、自己を表現する活動をするであらうが、そのうちに、そのような活動はやめて、保育者が指示をしなければ活動をしない、また指示した活動よりしない、無氣力な幼児になってしまうであらう。

そのためには、自己をじゅうぶんに表現できるためのじゅうぶんな時間が、登園後に用意されなくてはならない。そして、このような時間は、一日の活動中でもっとも重要な部分を占めるべき

である。

しかも、この時間は連続して与えてやるべきである。同じ時間でも、すこし与えては別の活動を一齐にさせ、またすこし与えて別の活動をさせるといふように断続的に与えたとすれば、幼児は、いつ別の活動に入るかもわからない不安のために、安定感をもって、自己をじゅうぶん表現することが不可能になり、しんげんに活動にとりくむことができなくなってしまふであらう。

もちろん、入園当初は、

「なにかしたいんだけれども、なにをしてよいかわからない」といふような幼児も相当いるだろう。またその日の状態によつて、

「したいけれど、したいことがうまくみつからない」

幼児もいる。

しかし、そのような幼児たちのためにも、時間をじゅうぶん与えてやることは、やがて、ほんとうに自己を実現したい活動をつけたす糸口をつくつてやることにならう。

結局は、時間がじゅうぶんになければ、したい活動をする事なく、一日が終つてしまふということになる。また、幼児にとつては、したい活動をみつげるためにも時間が必要なのである。

(iv)

保育者がそばにいてほしい  
保育者といっしょに遊びたい

保育者としては、じゅうぶんな時間を与えてやることは、もちろんたいせつであるが、このような幼児の生活リズムを見透し、その幼児のこれまでの活動の状態をみて、幼児の要求をくみとって援助してやることも、とてもたいせつなことである。

このような場合、幼児の中には、「保育者がそばにいてほしい」「保育者といっしょに遊びたい」という要求をとくに強くもっているものがたくさんいるのである。

幼児は、保育者と接することによって、その中で安定して、自己の表現したい方向をみつけどさうと努力するだろう。また幼児と遊んでいる間に、幼児はほんとうの要求を保育者に伝えてくれるものである。このような幼児との交渉は、幼児の活動を支えているもつとも重要なものである。

このような幼児との交渉の中で、ほんとうの指導がされるだろう。しかも、幼児は、「どのような場合でも、ひとりひとり保育者と交渉したがっている」ものなのである。たとえば、みかけは集団で話をしていても、ひとりひとりの幼児は、自分と話をしてもらっているつもりで聞いており、感情を動かしているのであるこ

とに留意すべきである。

いずれにしても、このような幼児をうまく活動させようとして、解決をあまり急ぎすぎると、幼児にとっておせっかいになることも起こりうるであろう。

そのためには、幼児の活動を見透し、幼児の要求や感情を受けとめ、幼児の活動がうまくいくように、必要とあれば、いつでも援助や準備のできる保育者であることがたいせつである。

(v)

保育者といっしょにみんな遊びたい

さて、これまで述べてきたような活動で、「自己をじゅうぶんに表現」した幼児たちは、こんどは、自分だけではできない活動を保育者に要求する。それは、幼稚園教育要領のことばで表現すれば「学級全体で行なう経験や活動」ということになろう。

幼児は、「自己をじゅうぶん表現する」なかで、「あの子と遊びたい」「あの子と遊べるかしら」というように友だちを要求する。五歳児ぐらいになれば、四・五人の友だちとはうまく遊べるし、その中でさらに、自己をじゅうぶん表現していくことが可能である。

しかし、学級全体で活動することは、幼児たちにとっては不可能である。そこで、学級全体で、みんなもいっしょに活動したい



という要求となり、それを保育者が中心となってしてくれらることを要求する。

うたをうたったり、リズムをしたり、リレー遊びやゲーム遊びをしたりなどの活動は、みんながいっしょでなくては興味のないう活動である。

しかし、このような学級全体とする活動は、幼児にとっては、ひじょうに緊張し、疲労のはげしい活動である。だから、あまり長時間にわたることは無理がある。そこで、緊張の解消的な条件の多い、ゲーム遊びなどを中心としながら、緊張、解放のリズムを、この活動の中にじゅうぶんとり入れるとともに、いろいろな変化をもたせていく必要がある。

学級全体とする活動は、一日の生活リズムからみると、じゅうぶんの時間をかけて、自己をじゅうぶんに表現したあとにすることが望ましい。このような一日の活動のリズムのくり返しは、幼児の活動にとって、もっとも基本的なものであろう。

(vi)

幼児は生活リズムのくり返しと変化を要求している

幼児の活動は、一日を単位としてみると、これまで述べてきたようなリズムのくり返しを中心とならう。だから幼児は、そのリズムの中で安心して活動ができる。

せつかく、幼児がやりたい活動をみつけてとりくもうとしたとたんに、保育者が無思慮に、または自分のもっている計画だけに従って、俗にいう「お集り」がかかったりして中止されることが多くては幼児は本気にとりくもうとする氣力をなくしてしまうだろう。だからといって、じゅうぶんに自己を表現することはもつともたいせつなことではあるが、毎日同じようなことのリズムのくり返しでは、そのリズムになれて、マンネリズム化してしまう恐れもでてくる。

幼児は、生活リズムのくり返しを要求するとともに、ときにはそれを變化させてほしいということも要求しているのである。園外保育、誕生会などの行事は、このような面でひじょうに有効である。しかし、このようなことも、よく考えてみれば、一年とか、学期とか、月とかを単位としたくり返しのリズムでもある。そこに、一日の幼児の活動をさらに調整する長期の計画が必要であり、そういう大きなサイクルでのくり返しは、一日の活動に變化を与え、一日の活動がより充実していくことになる。

### (3) くり返される活動と發展する活動

これまで、幼児の要求を中心に一日の活動をみてきたが、これを活動という面からみていくと、幼児の一日の活動の中を、くり

返される活動と、発展する活動とに分けることもできる。

つまり、朝登園して、下靴と上靴をとりかえ、先生とあいさつをかわし、衣服を着替え、便所にいったり、うがいをしたりして、いろいろな活動をし、あとかたづけをして食事の準備をしたり、食事をしたというように、一連の毎日くり返される活動がある。これらの活動は、それぞれの幼児の生活を構成している単位であり、このようなくり返しは、園の生活の中でひじょうに意味があるものである。逆にいえば、これらのくり返しがあから幼児の生活があるのであり、これらは、くり返されるたびに、幼児を發展させていくものである。

一方、このようなくり返しに対して、幼児が自己を表現するよきな活動は、リズムからみるとくり返しではあるが、内容において、前述のように、一日の中で相当に変化し發展する場合が多い。そのため、保育者はどちらかといえば、幼児の生活をないがしろにして、そちらの方にばかり気をうばわれ勝ちになりやすいし、学級全体の活動で、幼児が保育者の指示に従ってうまく活動してくれたり、それで保育ができてしまったような錯覚におちいり、安心してしまったりしやすい。しかし、幼児の園の生活は、毎日くり返される活動も、發展する活動も、ともに幼児を發展させるたいせつな活動であることに留意しておきたいものである。

そして実際には、毎日くり返される活動の時間は、園の生活の中で、相当の時間をとっているのである。

#### (4) 幼児の一日の活動と指導

さて、これまで、幼児の要求を中心に、一日の活動の流れをみてきたが、幼児の要求を、どのように受けとめ、見透し、それにくみとり、さらに、それらの活動がよりよくなされるように準備するかということが、指導のもっとも基本的な問題になろう。

とくに一日の活動は、その過程においてもきわめて具体的であるので、指導もきわめて具体的なものとなろう。

だから、よりよく指導するためには、一日の幼児の活動の、より具体的な変化についても、幼児の發展をも含めて具体的に理解しておくことがたいせつである。

そこで、以下に、自己をじゅうぶん表現する活動を中心として、幼児の活動の変化を、「幼児のはじめてとりくんだ活動」「幼児の一日の活動の変化」という二点から、考えていくことにするが、この問題については次号にゆずることにする。

(註) 四日市市立泊山幼稚園、「幼児にのぞましい経験や活動をもたせるには」—保育の過程を中心として— 昭43